

純白の衣裳をまとった女性が立っている。まずその透明な声に引き込まれる。彼女が一人ぼっちであることはすぐわかる。彼女は「近づきたい」と願う。孤独が、地球と月の大接近という、とんでもない事態を引き起こす。

「月が地球にどんどん近づいており、90分後に衝突する」との首相(?)会見があり、人々はパニックに陥る。

「□□□・ミーツ・□□□」の上演時間90分は、イコール命の時間である。その後はどうなるのか。観客が、ある意味で安心して乗れる仕掛けによって、進行していく。

衣裳に圧倒的な魅力がある。その配色の妙。白、黄～茶、青、紫などが活きている。あえてデザインにはいまの日本の服とあまり違いがない。しかし、色を見れば、現実世界とは微妙にズレているとわかる。SFの平行ワールドの感覚を、色彩が牽引する。

暴走族の特攻服の刺繍、葬儀屋のズボンの裾など、細かいところも目を引く。

セットもいい。二階部分中央には、ギリシャ風の飾り柵がある。神話から宇宙に広がるイメージだ。対して一階には、障子のような格子、下町の路地でも想起させるような和のテイストがにじむ。二つの世界の違いがくっきりしている。

小道具も、細かく作り込まれている。シンプルながらネギの使い方など効いている。気になったのは包丁で、出てきた以上、事件が起きないのは不自然に感じた。

照明が要所要所を締める。闇のなか、スポットライトを当てる場面の静謐さなど、心に残る。逆に明るい場面はもう工夫あってもよい。

音楽は芝居から浮くことがなかった。大事なことだ。なんといっても「ミュージシャン」が思い切り歌えるようになり、ギターを弾けるようになったラストシーンがすべてだ。「ミーツ」の詞・曲の素晴らしさが、見事に芝居を高みに昇らせた。

ここではスタッフ一人一人の名前が挙げられないので、キャストについても役名を記すに留める。エイリアン、総長の演技が際立っていた。

最後に、脚本と演出について。大学の卒業公演であるということは、言うまでもないが多くの制約がある。なにより、限りのある上演時間で、大勢のキャストをどう活かすかという大問題を抱えることになる。きちんとそれぞれの人生を描きたい、できれば全員それぞれ見せ場も欲しい、と悩むところだろう。

脚本・演出のメンバーは、その悩みに、自分なりの答えをしっかりと出した。これがいまの自分だ、と全身を差し出した。堂々としたデビューである。

キャスト・スタッフの皆が「新しいわたし」の手がかりを掴んだ——観客の目にも、そう思える公演だった。いま誰もが寄り添いたい、近づきたいと切なく願っている。新しい形で願いをかなえてみせる、との誓いがここにある。

ひとつ注文は、キャストのマスクについて。もちろんコロナ禍の現在、大人数で上演するにはマスクが必須だ。だからこそ、なぜマスク姿なのか、なんでもいいから理屈が欲しい。その世界では異常に空気が悪いでもなんでもいい。

純白の女性だけは違うデザインにする選択肢もあり得る。全員が同じ型のマスクをしていることには、芝居としての理屈が要るのではないか。今後まだしばらく、演劇公演には厳しい状況が続くだろう。だからこそ、こういう点も、この先向き合っていかなければならない。

「新しいわたし」は、始まったばかりだ。